

研究課題	他学派との論争からみた インド大乘仏教における論証式の形成と展開
研究代表者	児玉 瑛子 (仏教学研究科仏教学専攻)

1. 研究目的

本研究は、仏教と他学派の論争という視点を軸にインド大乘仏教における論証式の形成と展開を解明することを目的としている。本研究が主要資料とするのは、仏教論理学の大成者ダルマキールティ（7世紀頃）の『論理の滴』（*Nyāyabindu*）と、彼の後継者ダルモータラ（8世紀頃）による註釈書『論理の滴註』（*Nyāyabinduṭīkā*）、そしてその復註であるドゥルヴェーカミシュラ（11世紀頃）の『ダルモータラの灯火』（*Dharmottarapradīpa*）である。これらの文献から論証論を扱う第三章を取り上げ、文献学的研究（サンスクリット語校訂テキスト・訳註の作成）を行う。その成果に基づき、ダルマキールティの論証論とダルモータラ・ドゥルヴェーカミシュラの解釈を体系的に整理するとともに、彼らの論証論が形成、展開する過程で他学派からどのような批判が行われたのかを考察する。当該章では論証方法について言及されるだけでなく、ニヤーヤ学派やミーマーンサー学派などといった他学派の論証式が数々の例示として現れる。それらを手がかりとしながら「大乘仏教の思想形成と展開の過程において、他学派との論争はどのような影響を及ぼしたのか」という問いに対する一つの答えを提示することを目指す。

2. 研究方法

上記の目的に対し、次の三つの作業に基づいて研究を行った。

- (1) 『論理の滴』および註釈書である『論理の滴註』、『ダルモータラの灯火』第三章のサンスクリット語校訂テキスト・訳註を作成する。
- (2) 上記(1)の成果に基づき、ダルマキールティの論証式の構造およびダルモータラとドゥルヴェーカミシュラの解釈を明らかにする。
- (3) 仏教内の関連文献に見られる(1)との平行箇所を讀解し、ダルモータラとドゥルヴェーカミシュラの解釈における特色について考察する。

インド論理学を対象とする研究は国内外を問わず無数にあり、特に日本での仏教論理学研究は世界でもトップレベルにある。しかし、ダルマキールティの論証論は、彼の認識論や推理論と比して研究が進んでいない領域であると言える。そうしたダルマキールティの論証論に関して、重要な要素を最も簡潔にまとめた著作が、本研究で主要資料とする『論理の滴』第三章である。『論理の滴』は、ダルモータラの『論理の滴註』とあわせてサンスクリット語写本が現存することから、19世紀末以

降、校訂テキストとそれに基づく翻訳研究が多数発表されてきた。しかし、第三章の内容を体系的に整理するような研究はまだ行われていない。以上のことから、本研究では、『論理の滴』第三章およびその註釈書を主要資料として設定した。

研究代表者は、本研究課題に取り組む前年度（令和元年度）より、特に先行研究が少ない実例セクション（第 121 スートラ以降）から（1）（2）の作業を開始していた。令和 2 年度はその作業を継続するとともに、章冒頭からの作業に移行した（『論理の滴』第三章の構成については表 1 を参照）。『論理の滴』および『論理の滴註』については、サンスクリット語写本および諸刊本（PETERSON 1889, MALVANIA 1955 など）とチベット語訳を、『ダルモータラの灯火』についてはサンスクリット語写本および MALVANIA 1955 を参照し、校訂テキスト・訳註の作成を行った。

章（スートラ番号）	主題
第一章	知覚 (pratyakṣa)
第二章	自己のための推理 (svārthānumāna)
第三章	他者のための推論 (parārthānumāna)
(1-7)	他者のための推論の定義・分類
(8-22)	〈同じ属性をもつこと〉を有する [論証式] (sādharmyavat)
(23-25)	〈異なる属性をもつこと〉を有する [論証式] (vaidharmyavat)
(26-36)	論証式総説
(37-54)	主張命題 (pakṣa)
(55-56, 109)	疑似論証因 (hetvābhāsa/sāadhanābhāsa)
(57-65)	不成立 [因] (asiddha)
(66-80, 93-108)	不確定 [因] (anaikāntika)
(81-92, 110-120)	相違 [因] (viruddha)
(121-122)	実例 (dṛṣṭānta)
(123-136)	疑似実例 (dṛṣṭāntābhāsa/dṛṣṭāntadoṣa)
(137-138)	論駁 (dūṣaṇa)
(139-140)	疑似論駁 (dūṣaṇābhāsa)

表 1. 『論理の滴』第三章の構成概略（※訳語は暫定的なもの）

（3）の作業にあたっては、まず同じ『論理の滴』から派生した註釈文献から、ヴィニータデーヴァによる『論理の滴註』（『論理の滴』への註釈、チベット語訳のみ現存）や、マツラヴァーディンによる『ダルモータラ・ティッパナカ』（*Dharmottaraṭippanaka*, ダルモータラの『論理の滴註』に対する復註、サンスクリット語のみ現存）を参照した。そのほか、関連文献として、ダルマキールティの主著『認識論決択』（*Pramāṇaviniścaya*）とダルモータラとジュニャーナシュリーバドラがそれぞれ著した『認識論決択註』（*Pramāṇaviniścayaṭīkā*）などを参照した。

3. 研究成果と公表

（下記（1）～（3）は、2. 研究方法（1）～（3）と対応する。）

まず（1）（2）の作業については、オンライン研究会を週一回開催し、仏教認識論・論理学の専門家である三代舞氏（日本学術振興会特別研究員 PD）の協力のもと、研究代表者が作成した校訂テキストおよび訳註の精査を行った。具体的な読解箇所としては、他者のための推論の定義・分類（第 1-7 スートラ）を読了したのち、論証式セクション（第 8-36 スートラ）の校訂・翻訳作業を進めた。当初、令和 2 年度は主張命題セクション（第 37-54 スートラ）を重点的に読解する予定であった。しかし、令和元年度～2 年度にかけて検討した実例セクションには、論証式セクシ

ョンとの内容に重要な繋がりがあることを考慮し、予定を変更して章冒頭から作業を行った。

(3)の作業については、上記(1)(2)において特に問題となった点を中心に、2. 研究方法に挙げた『論理の滴註』(ヴィニーターヴァ)、『認識論決択』および『認識論決択註』の平行箇所を検討した。ダルモータラの『認識論決択註』は、これまでチベット語訳のみ参照可能であったが、令和2年12月に新出写本の転写テキストが刊行された(HUGON 2020)。『認識論決択註』は、本研究の主要資料の一つである『ダルモータラの灯火』にたびたび引用されることが知られている。HUGON 2020に基づいて(1)で作成した校訂テキストを精査したところ、両文献における多くの平行箇所が実際に確認できた。『ダルモータラの灯火』は、サンスクリット語写本が一本しか現存せず、チベット語訳も伝わっていないため、写本の欠損部などの解読はほとんど不可能な状態にあった。しかし、『認識論決択註』の写本情報が参照可能となったことにより、読解困難箇所のサンスクリット語を想定する手段がもたらされた。

主要資料の校訂テキストのうち、MALVANIA 1955は『論理の滴』『論理の滴註』に関して従来の諸刊本の不備を改善した貢献が大きく、さらに『ダルモータラの灯火』においては唯一の校訂テキストである。そのため、現在多くの研究者によって底本として採用されているが、『論理の滴』本文にさえ修正の余地は残されている。『論理の滴』に限らず、現存する仏教論理学文献の多くが20世紀中頃までに校訂出版され、それらを用いた当該分野の研究状況は急速に進展している。参照可能な周辺資料の蓄積を鑑みても、こうした校訂テキストに対して現代の研究水準に基づく再校訂が求められていると言える。

また、これまでダルマキールティの論理学研究においては、論証において最も重要な位置を占める論証因の解明、すなわち推理論が重視されてきた。論証式の提示そのものに関わる概念や、論証因をより確かなものとして示すための実例に関する研究はほとんど行われていない。しかし、論証式の構成要素の機能はそれぞれ密接に関わりあっている。そうした実例などを含む論証論の全体像を本研究が明らかにすることで、論証因を対象とする多くの先行研究の成果との有機的連関が期待できよう。

以上、(1)～(3)の作業によって得られた成果の一部は、下記の論文にまとめて発表した。

児玉瑛子「ダルモータラの *dr̥ṣṭāntābhāsa* 論 — *apradarśitānvaya/apradarśitavyatireka* の場合—」『印度学仏教学研究』69(2), 査読あり, pp.834–831, 2021年3月。

当該論文では、ダルマキールティが規定した疑似実例の中から、「肯定的随伴が明示されない〔疑似実例〕(apradarśitānvaya)」と「否定的随伴が明示されない〔疑似実例〕(apradarśitavyatireka)」という項目に着目した。これは、〈遍充〉と〈主題所属性〉からなるダルマキールティの二支論証式に特有の概念であり、彼以前の三支論証式(〈主張命題〉, 〈論証因〉, 〈実例〉)や、ニヤーヤ学派等が用いる五支論証式(〈主張命題〉, 〈論証因〉, 〈実例〉, 〈適用〉, 〈結論〉)には見られないものである。その中で、ダルモータラが強調し、ドゥルヴェーカミシュラも認めた「話者の過失」(vakṛdoṣa)という概念を重点的に検討し、自己のための推理と他者のための推論においては、論証の諸要素が果たす機能に違いがあることを明らかにした。

令和2年度は、このほかに2～3回程度の学会発表および論文投稿を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、発表予定の学術大会が中止となったため実現しなかった。未発表の成果については、令和3年度以降に順次発表する予定である(児玉瑛子「他者のための推論における喩例の役割」第64回智山教学大会, 東京, 2021年5月28日発表予定 など)。

令和3年度以降は、令和2年度までに行ってきた(1)～(3)の作業に継続して取り組むとともに、ニヤーヤ学派やミーマーンサー学派などといった他学派の文献にも検討範囲を広げ、ダルマキールティの論証論の形成と、ダルモータラやドゥルヴェーカミシュラへの展開において、仏教外の他学派との論争がどのような影響を与えたのか考察していきたい。

参考文献

- HUGON Pascale. 2020. *Dharmottara's Pramāṇaviniścayaṭīkā, Chapter 3, Diplomatic Edition*. Beijing–Vienna: China Tibetology Publishing House & Austrian Academy of Sciences Press.
- MALVANIA Dalsukhbhai. 1955. *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa [Being a sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu]*. Tibetan Sanskrit Works Series, vol. 2. Patna.
- PETERSON Peter. 1889. *The Nyāyabinduṭīkā of Dharmottara Āchārya: To Which Is Added the Nyāyabindu*. Asiatic Society.